

別子往還道を訪ねて

第一回 序章

別子銅山。

かつて、日本の「三大銅山」のひとつに数えられた世界的にも高名な鉱山です。

稼行開始は元禄4年（1691年）ですから、犬公方として有名な徳川5代将軍綱吉の時代になります。ちなみに「赤穂浪士」は、元禄15年（新暦では、翌年1月）の出来事です。同じ元禄15年に、新居浜浦に銅の積み出し港が設けられます。口屋（浜宿）です。それ以降、標高1294メートルの銅山越の南側で掘り出された銅は、北に向かってまっすぐ最短ルートで口屋に向かって運ばれることになりました。明治の初期までは「仲持さん」により、立川の中宿まで運ばれたあと、中宿からは馬の背にゆられ登り道を下っていきます。明治13年には牛車道の完成により、牛を使つての運搬が開始、そして明治26年には、国内初の鉱山鉄道と索道による運搬が開始され、大量の銅を運ぶことが可能になります。

まるで背骨のように新居浜市の真中を貫き、新居浜の発展を支えてきた銅の運搬路を『別子往還道』と捉えています。『往還』というのは、その土地の主要街道を意味する古い言葉ですが、立川や山根、喜

光地でも古老たちの話では、銅の運搬路を『往還』と呼んでいたといった証言を得られています。

次回からは、『別子往還道』周辺を中心とした別子銅山産業遺産遺産群を集積地ごで紹介していきます。まずは、別子銅山開坑の地である「旧別子」を予定しています。



現在の立川中宿

別子往還道イメージ図

(別子往還道を育てる会 我孫子 尚正 氏 提供)

市政だよりにはま (通巻七十九号) 平成二十三年五月一日発行 毎月一回一日発行

広告欄

広告欄